



### 葬儀の意味とその内容

専ら通夜の翌日に行われる葬儀は、戒を授かり仏弟子となっていたいただいた故人を仏国土（みほとけの世界）へとお送りする儀式です。その旅立ちが安らかになるように願ひ、遺された人々の悲しみをやわらげるとともに、儀式の最後に唱えられる引導法語によって、故人の遺徳を讃えながら仏法の真意を述べ、これによって仏の道へと導くのです。

#### 【葬儀】

○入棺調経…ご遺体を棺の中に納める際に唱えるお経。（通夜前火葬の為、当寺では略）  
○棺前念誦…棺の前で大悲心陀羅尼を唱え及び諸仏のお名前『十仏名』及び『舍利礼文』を唱える。

※『大悲心陀羅尼』…意識ではなく音訳された経典の一つ。千手千眼観世音菩薩さまの功徳を讃えたお経。

※『十仏名』前の回向の現代語訳…

「つらつら、おもうに、生と死が互いにいれかわり、あたかも、暑い夏が過ぎて、寒い冬が訪れる季節の進行に似て、いま、あなたは、この世の生をおえました。この世に生まれたとはいえ、ちようど、おおぞらに

稲妻の瞬時にひらめくにも似て、はかないものであります。いまや、波静まりかえる大海の平穏なるがごとく、ひとたび去って、静けさの境地に入られました」  
※『十仏名』…葬儀場にお招きした、諸々の仏さま及び経典の名前。故人が無事に成仏できるよう、諸仏のご加護を願ひ、故人の修行の道案内を託すもの。

※『十仏名』後の回向の現代語訳…

「さて、これまで十仏名を心に念じて、誦みあげ、また『舍利礼文』を読誦いたし、その功徳を、新仏にめぐらし向けます。謹んで、とりわけ願ひたいことは、新仏の本質的な生命と、それが造りなした行為とが、浄土や娑婆や、迷いと悟りのいずれをも超え去り、蓮が泥水に汚されることなく、美しい花を開くように、このうえないすばらしい仏の智慧の花を開き、そして、み仏は、新仏が今生において積み上げられた修行と奉仕の功徳によって、必ず成仏するという予言を授けてくださいますように。さあ、もう一度、僧侶の方々を、わずらわして、仏のみ名を念じましょう」

○挙棺念誦…棺を運び出す前に唱えるお経。

※『大宝楼閣善住秘密根本陀羅尼』…お釈迦さまの悟りの世界へと続く道が開かれるように祈る陀羅尼。

○引導法語…故人を顕彰し、仏弟子としての心構えを説く。  
※使用する法具…

○安位調経…納骨・仮安置に際して唱えるお経。

#### 【取越法要】

※遠隔地からの会葬者・会食に配慮して百箇日まで前もつて追善供養を行なう。

○本尊上供…お釈迦さま、道元禅師・瑩山禅師に対して『般若心経』を読経し、故人の導きを願ひつつ、葬家の家道興隆・息災安穩・諸災消除・諸縁吉祥を祈願する

○年回忌調経…『妙法蓮華経観世音菩薩普門品偈』等を唱え、開蓮忌（亡くなって三日目）、初願忌（初七日）、大練忌（四十九日）、卒哭忌（百か日）の追善供養を行なう。

#### 【通夜・葬儀に参列するにあたって】

通夜や葬儀に参列する時は、参列本来の意味を忘れないように心がけたいものです。通夜・葬儀は故人をお送りする式であり、故人との別れの式でもあります。故人の冥福、死後の安楽を心から祈るとともに、故人との別れを行うことが、参列する人それぞれに求められているのです。また、故人を失って悲しみに暮れる遺族の心を思いはかり、悲しみを共にすることや、なぐさめの思いを伝えることも、忘れたくないところです。

突然の悲報に接し、仕事などに追われながら参列することもあろうと思いますが、できるだけ時間の余裕をもって参列するこ

・法炬…お釈迦さまの火葬の際、なかなか薪が燃えなかった。一番弟子の摩訶迦葉尊者が駆けつけ、お釈迦さまの遺体の周囲を三度周り、丁寧な礼拝したところ薪が自然に燃え出したことに由来する

・払子（故人の煩惱を払う）

・一字闕…師匠が一語をもって弟子に真理を伝えるために発した言葉。喝（叱ること）で激励する）、「露」（真理は目の前にあらわれている）、「嘆」（誤った考えを笑い飛ばす）、「咄」（「喝」と同様）、「参」（参究すべし）

・鑊鉞…銅などの金属で作られた鳴らし物。敵かな調べによって諸々の仏さまや菩薩さまを葬儀場にお招きし、故人を仏さまの世へ導く道案内を託し、その成仏を願ひながら送り出すために鳴らされる。

・引磬…携帯用の鳴らし物の一種。導師を先導する際や僧侶全体に動作の合図を送る際に鳴らされることが多い。

○山頭念誦…茶毘に付す（火葬する）ことを知らせる。

※山頭念誦の回向の現代語訳…

「この日、ここに、新たにこの世をおわり、本元に帰された方は、既に、この世に生存すべき因縁が尽きて、静かに涅槃の境界に入られました。そこで、古来のさだめに従って、火葬にいたします。この世に生をうけて、百年に満たぬほど、まぼろしにも似た、むなししい身ではありますが、この幻化の身一はかない肉身を焼き（埋め）、ただ、まっし

とが望まれます。故人の最後の時を、心静かに見送るよう心がけてください。

お焼香の際は、祭壇に向かい合掌し一礼の後、抹香をつまみ額の前で丁寧な念じてから焚きます。続いてもう一つまみ香を焚きます。これを従香と呼びます。曹洞宗での焼香は、この二回が基本となりますが、焼香人数が多い場合は、一回の焼香でお参りしましょう。お焼香の後は今一度合掌一礼いたします。立ち上る香の煙を見ながら、手をあわせ、故人を思い冥福を祈ります。服装や立ち振る舞いも含め、故人を弔う思いが伝わるよう、心に留めて参列しましょう。

